

非財務情報開示への理解を深める勉強会

昨今、世界的に重要性が高まる非財務情報開示の動きをどう捉え、TDKグループとしていかに対応していくべきか——。2015年3月、TDK本社において2名の有識者を迎えた勉強会を開催しました。14名のTDK役員・各本社機能のスタッフが参加し、両氏に幅広い観点から講演をいただいたのち、TDK出席者を交えた活発な議論が展開されました。



実施日：2015年3月31日

開示への期待が高まる非財務情報の重要性とは

勉強会では、SRI、CSRの専門家である（株）日本総合研究所の足達英一郎氏と機関投資家であるニッセイアセットマネジメント（株）の井口讓二氏に、非財務情報開示をめぐる昨今の潮流について、示唆に富んだお話をいただきました。

EUでは長期的な経済成長と雇用向上に向けて、非財務情報の追加開示を求める改正案が可決され、日本でも、中長期的な企業価値向上のための指針を示した「コーポレートガバナンス・コード」と、機関投資家に責任ある投資を促す「スチュワードシップ・コード」が、2014年以降両輪として整備されてきています。前半では両氏には、特に環境（Environment）、社会（Society）、ガバナンス（Governance）というESG要

因について注目が高まる状況をご説明いただきました。

後半では、TDK出席者との質疑応答が交わされ、「企業価値創造に向けた企業行動のあり方が活発に議論され、投資家と企業の対話を促進することが必要になる」「的確なESG評価のため、今後ますます企業と投資家との対話が重要になる」「投資家の目を短期から中期へ導くような開示方法を考えていくことも大切」「グローバル展開を続ける上では、海外拠点での労働・生産体制などへの適切な取り組みと情報開示が不可欠」などの点が確認されました。また、「肌感覚としてESGが重視されてきているのを感じており、当社も情報発信のあり方を見直していくべき」といった気付きの声もTDK出席者から聞かれました。



有識者からの主な意見・提言



株式会社日本総合研究所
理事
足達 英一郎 氏

責任投資の規模は拡大し続け、2013年末には機関投資家による全世界の投資の約30%を占めるまでとなっています。こうした潮流を捉え、非財務情報を積極的に開示し、企業経営やIR活動に反映していくことが欠かせません。そんな中、金融庁がスチュワードシップ・コードによって、機関投資家に投資先企業の社会・環境問題のリスク対応状況を把握するよう求めた意義は、非常に大きなものです。コーポレートガバナンス・コードの策定もまた、社会・環境問題への対応をコーポレートガバナンスの構成要素として認める画期的な動きでした。

大切なのは、投資家は企業のCSR全体を流し見るのではなく、各社の事業とのつながりの中で特に重要なリスク・機会となるESG要因を見極めようとしている点です。多くの投資家が、企業のさまざまな背景の違いを踏まえ、各社の強みや特性に注視し始めています。だからこそ、これらの情報開示は経営ベースで考える必要があり、CSR担当部門に任せきりにすることなく、全社で推進していくことが極めて重要なのです。



ニッセイアセットマネジメント株式会社
株式運用部 担当部長
チーフ・コーポレート・ガバナンス・オフィサー
井口 讓二 氏

スチュワードシップ・コードに基づいた長期投資の前提となるのは、企業活動を多面的に理解することです。ESG評価を運用プロセスに組み込み、企業分析を実践することは、この多面的な活動に対する理解の促進につながり、長期的には投資パフォーマンスの向上に寄与すると考えています。このプロセスにおいては、短期的な売上高や収益などの財務情報以上に、企業理念や経営戦略、環境規制への対応、経営層と従業員との関係といった非財務情報が大切になります。特に、ESGのS（社会）は企業のDNAであり、企業価値の源泉となります。投資家にとっても最重要視すべき事項となります。このようなESG分析を通じた投資家の活動が、企業との建設的な対話にもつながります。

中長期視点で書かれたアニュアルレポートは非常に大きな存在です。ESG視点を取り入れ、財務・非財務情報を統合した報告書を作成することは、企業価値の創造プロセスを示していく上では必要不可欠なものとなります。貴社の事業や製品をめぐる情報発信は大変優れています。理念や長期ビジョンなどについても十分伝えられるよう、今後の進展にぜひ期待したいと思います。



TDK株式会社
取締役
常務執行役員
米山 淳二

勉強会を終えて

企業を「人」に例えれば、財務情報は検査で数値化できる学力や体力のようなものであり、非財務情報は実際に対話を重ねて付き合ってみなければ分からない、性格や人柄に当たるものだと思います。近年では、当社への取締役会評価などでも「TDKグループのDNAとは何か、それをどのように全社に浸透させているか」といった質問を受ける機会が増えています。財務情報にも増して、私たちの「人となり」を見極め、長期的な信頼に足り、将来性を期待できる会社かどうかを測る視点が強まっているのを感じます。創業80周年を迎える当社の良き伝統や風土を活かしてESG各分野での取り組みを進化させ、それを的確に発信していくことで企業価値向上につながっていきたく思います。